デュラス×ミッテラン対談のリアリティ
－『デュラス×ミッテラン対談集　パリ６区デュパン街の郵便局』について－

坂本佳子

A Reality of the Dialogue between Duras and Mitterrand
About *Le bureau de poste de la rue Dupin*

Yoshiko SAKAMOTO

In this essay, we take up Duras's first interview with Mitterrand in *le Bureau de poste de la rue Dupin*, with the aim of shedding light on the real functioning of their dialogue. We analyze their speech by making reference to *la Douleur* in which Duras has written the deportation of Robert Antelme and a French resistance movement during World War II.

In their complex dialogue, fear, as a coherent memory, helps them in their memory effort. Duras and Mitterrand's effort, with free speech on the border between literature and politics, highlights the ambiguities of collaborators and resistance fighters. These ambiguities remain, in fact, as an insoluble enigma, after a long silence and the execution of collaborators with Germany so that there arises another tragedy lying deep in the former resistance movement.

Recalling this tragedy and other deep "douleur" of the resistance movement Duras's endless resistance. Therefore a certain realism is in this dialogue insofar as Duras and Mitterrand's words clearly bring out this endless resistance.

Keywords: Marguerite Duras, François Mitterrand, Robert Antelme, Douleur, résistance, mémoire

はじめに

1985 年 7 月に行われた作家マルグリット・デュラスと大統領フランソワ・ミッテランの対談が、『ロートル・ジュルナル』（*L'Autre Journal*）誌に掲載され、これがテレビ・ニュースで報道されたのは、1986 年 2 月のことだった。同誌の編集者ミシェル・ビュテルにより企画された二人の対談は、1985 年 7 月から翌年 4 月までの 5 回にわたって行われた。当時のフランスのテレビ局 FR3 が報じたように[1]、作家と現職大統領の対談シリーズは異例であり、公開された大統領の発言として、その内容の茫漠とした様子は際立っている。「対話は、友愛に満ちたありとあらゆる会話がそうであるように、こちらからあちらへ〔...〕別のテーマへと移っていく。それはあえて枠組みを与えられ、厳密化されるが、すぐに言葉の自由が権利を取り戻してしまうのだった」（*BPD*, p.9, 六頁）。対談が書籍化された際に付された序言でマザリーヌ・パンジョがいみじくも言いあらわしているように、とりとめのなさは彼らの対談を全面的に支配している。作家と政

[1] L'Institut national de l'audiovisuel, *Entretien Mitterrand Duras*（https://www.ina.fr/video/CAC86010078）（アクセス日；2021 年 1 月 28 日）。

治家の言葉が自由に交わされて公になるとき、そこにおける現実性（リアリティ）は文学と政治のあいだでいかなるものとなるのか。本稿では、『デュラス×ミッテラン対談集　パリ 6 区デュパン街の郵便局』が現実とのあいだに結ぶ関係について、第 1 回対談に焦点を絞ったうえで、デュラスの作品を手がかりとしながら若干の側面を浮き彫りにしたい。

1. 忘れられたノート

『デュラス×ミッテラン対談集　パリ 6 区デュパン街の郵便局』（以下、『対談集』と略記する）に収録された 5 回の対談のうち、第 1 回目が実施されたのは 1985 年 7 月 24 日のことである。これは、同年 4 月にデュラスの『苦悩』が出版されたあとにあたり、ミッテランはデュラスから贈られたその本を、エリゼ宮ですぐに読んだと言う（*BPD*, pp.31-32, 三九頁）。まさにこの『苦悩』に収録されているところの、デュラスによれば「文学が恥ずかしくなる」ほどの日記や「文学の沖に出るものではない」テクストの内容が、第 1 回目の彼らの対話のテーマとなったのだった。「文学が恥ずかしくなる」、つまり文学を凌駕するその日記とは、パリのゲシュタポによって逮捕され収容所に送られた夫「ロベール・L」の帰りを待つ妻の「マルグリット」が、極限状態の中で記したものという設定になっている。「ロベール・L」の L は、マルグリット・デュラスと当時の夫ロベール・アンテルムのレジスタンス名「ルロワ（Leroy）」の頭文字を思わせる。すなわちこの日記は、パリ解放の 2 か月ほど前にあたる 1944 年 6 月 1 日に逮捕されたロベール・アンテルムを待ちわびるマルグリット・アンテルム（すなわちマルグリット・デュラス）の手になる記録が作品化されたものなのである。

ロベール・アンテルムの一件を簡単に説明しておく。その日、ロベールと彼の妹のマリー＝ルイーズ・アンテルム、ジャン・ミュニエ、そしてフランソワ・ミッテランら[2]は、パリ 6 区にあるデュパン街 5 番地のマリー＝ルイーズのアパルトマンで会合をもった。ミッテランはレジスタンス運動のリーダーであった。同じ日の午前中、シャルル＝フロケ街での彼らの集まりは、すでにゲシュタポの手先に踏み込まれていた。やってきた覆面のゲシュタポの手先は、玄関で応対した指名手配中のミッテランではなく、別のレジスタンス仲間ジャン・ベルタンとの面会を求めた。相手がゲシュタポであるとは気づかなかったミッテランに呼び出され、奥から出てきたベルタンはその場で逮捕された（*BPD*, p.26, 三〇頁）。それゆえ、同日夕方の会合の集合場所は変更された。だが、そこにもまた午前中のゲシュタポの手先が訪ねてきたのだった。ミッテランは間一髪で危機を逃れた。彼はまず、デュパン街 5 番地の郵便局から、上階のマリー＝ルイーズの家に電話をかけた。すでにゲシュタポが捜査を始めていたそばで、マリー＝ルイーズはミッテランに間違い電話であると告げた。彼はもう一度、電話をかけなおした。いらついた調子で番号が間違っていると繰り返す彼女の声が返ってきた。事を察して引き返したミッテランは、家を出たばかりのデュラスに向かって遠くから合図を送る。デュラスはとっさに別方向へと逃げた。ロベール、マリー＝ルイーズらは収容所に送られた。ジャン・ミュニエはミッテランを探しに表に出ており、やってきたゲシュタポの手先を殴り倒して逃げおおせたことは、この『対談集』の巻末の補遺でミュニエが証言している。彼はその後すぐにデュパン街に戻り、ロベールらがゲシュタポの車に乗り込むところを目撃している（*BPD*, p.144, 一八四頁）。

ここでゲシュタポの手先と書いたのは、シャルル・デルヴァルと呼ばれていた男のことである。彼の様子は、『苦悩』の中に収録された「ムッシュウ X　仮称ピエール・ラビエ（Monsieur X, dit ici Pierre Rabier）」に描かれている。デュラスは『苦悩』にこの小編を収めるにあたり、男を「ピ

[2] ほかにポール・フィリップ、ミネット・ド＝ロカ＝セッラもその場にいたという。二人ともロベールやマリー＝ルイーズとともに収容所に送られた。ポール・フィリップは生還した。ミネット・ド＝ロカ＝セッラはラーフェンスブリュック収容所解放まで生き延びたが、フランスに帰国する前に力尽きた（*BPD*, p.141, 一八一頁；*AMD*, pp.276-277）。

エール・ラビエ」という仮名で描いた。デュラスの『苦悩』にもミュニエのテクストにも、そのゲシュタポの手先は背が高く、金縁の眼鏡をかけていたことが記されている（*DL*, p.112, 一三七頁; *BPD*, p.142, 一八二頁）。この男の素性は最後まで明らかにならず、シャルル・デルヴァルが本名であったかどうかも定かではなく（*BPD*, p.22, 二四頁）、戦前に亡くなったニース出身の人物の身分証明書を携帯していたがドイツ人ではなかったか、との推測が対談においてなされている（*BPD*, p.27, 三二頁）[3]。だが、2000 年にデュラスの伝記を公にしたロール・アドレール[4]によれば、実際にはドイツ好きのフランス人であったようだ（*AMD*, p.287）。1944 年 6 月 1 日の午前と午後の 2 回にわたりミッテランらの会合を襲ったのはこの人物であり、彼はその後もミッテランやデュラスにつきまとうことになる。

そのゲシュタポの手先に連行されたロベールの行方を探して、帰りを待ちながら書いた日記を、デュラスはパリ北西ノーフル・ル・シャトーの家の青い箪笥にしまい込まれたノートの中に見出したのだと言う。彼女は『苦悩』の冒頭にこう記している。

> わたしはこの日記を、ノーフル＝ル＝シャトーの青い箪笥に入っていた 2 冊のノートのうちに見出した。
>
> わたしには、これを書いたいかなる記憶もない。
>
> そうしたのはわたしで、これを書いたのはわたしだということはわかるし、わたしの書いた字（エクリチュール）であるということも、そこでわたしが語っていることの詳細もわかっている。オルセー駅や、歩き回った道などの場所も思い出せる。だが、この日記を書いている自分のことは思い出せない。いつ、これを書いたのだろうか、何年に、1 日のうちのいつ、どこで？わたしにはもはや何もわからない（*DL*, p.10, 六頁）。

「わたしには、これを書いたいかなる記憶もない」と言うデュラスに、フランスの映画雑誌『カイエ・デュ・シネマ』（*Cahiers du cinéma*）の編集者は問いかける。「文学や批評の専門家たちは、『わたしは昔、これを書いて、そしてそれを箪笥の中に見つけた』との言葉を信じず、あなたがごまかしをしたんじゃないかと考えている」（*YV*, p.239, 二五五頁）。前年の 1984 年には、仏領インドシナで過ごした少女時代のスキャンダラスな体験の描写を含んだ『愛人』で世界的成功を収めたデュラスが、2 年連続で作家自身の体験にもとづいた衝撃的な内容の作品を発表したということについて、人々は疑念を抱いたのである（*CG*, p.10, 一二頁）。デュラスは次のように反論する。

> 苦悩に関してはごまかしなどしていない。いったい何が言いたいのか？〔...〕ラビエのことは最近書いたけれど、これもたくさんのメモから書き起こした。ノートを見せてもいいですよ。あれを書いたのはどこでのことだったのか、もはやわからない。〔...〕だけどどこだったのか？仮収容センターで？いつ？ロベール・L が生き延びると確信したあと、それは間違いない。おそらく 46 年のヴァカンスのあとか？（*YV*, p.239, 二五五頁。）

また、『苦悩』を出版した P.O.L.のポール・オトチャコフスキ＝ロランスは、1996 年 6 月に行われたロール・アドレールとのインタヴューで次のように答えている。

> ある日、彼女〔デュラス〕が電話をくれて、ねえ、素晴らしいものを見つけたわよ、と言う。
>
> 感動した様子で見せてくれたのは、ぼろぼろと崩れ落ちるような学校用ノートにぎっしりと

[3] 『苦悩』にも同様の記述が見られる（*DL*, p.104, 一二七頁）。
[4] ロール・アドレール（Laure Adler ; 1950 年- ）はフランスのジャーナリスト、作家。

文字が書かれているもので、インクの色はあせており、ページは破れていた。終戦の時からまったく手を触れていないものだった。二人で話していると、すぐにいい考えが浮かんだ。その少しあとに書いて少々手直ししたテクストを付け足そうということになった。けれども、この書物の冒頭に置かれたテクスト「苦悩」には、彼女はまったく手を入れなかった。僕にとっては聖なるテクストだ。マルグリットの家を出てから、僕はテクストをコピーして、原本（オリジナル）はP.O.L.の棚に保管した。その夜、退社しながら、社が火事になったらと気が気でなかった（*AMD*, p.799）。

以上のようなデュラスとオトチャコフスキ＝ロランスの弁明は、何に対してのものなのだろうか。それは、ノートが存在するのかという疑念に、そしてノートが存在するなら箪笥にしまい込まれたそれは本当に忘れられていたのかという疑念に向けられている。さらにこれらの疑念は、そのノートにもとづきデュラスの作品に書かれたことがらは事実であるのかという、文学からはやや離れた問題を提起している。

さて、『戦争ノート』（2006年）が出版された今、このノートが存在することは明らかである。次に、青い箪笥にしまい込まれたノートは本当に忘れられていたのかという疑念についてはどうか。オトチャコフスキ＝ロランスは、デュラスが『苦悩』の執筆時に初めてそのノートの存在を思い出したかのように受け止めている様子だが、実際にはそうではない。「ロベール・L」を待つ「マルグリット」の話として1985年の『苦悩』の中に収められた「苦悩」については、同じテーマのものをデュラスはすでに1976年、「収容所で死ななかった」と題してフェミニストの雑誌『ソルシエール』（*Sorcières*）に匿名で投稿しており、その際に箪笥のノートを調べたことを、彼女は対談の中で自ら明らかにしている（*BPD*, p.33, 四二頁）。また、このテクストは『苦悩』が出版される前の1981年、『アウトサイド』（*Outside*）に収録され、その前文でデュラスはノートについて「ある意味で非時間的な日記であり、終戦に際してつけていたもの」であると書いている（*ŒC III*, p.1089）。そして『苦悩』の前に出版された『愛人』（1984年）も、この箪笥のノートの断片をもとにして書かれたことが知られている（*AMD*, p.776）。よって、『苦悩』の執筆時にデュラスが初めてこのノートを見つけたというわけではないことは、確かである。

ある作品が作家の実体験にもとづいており、その体験の記されたノートは忘れられていて、そしてそれが発見されたというエピソードは、作品に一定の神秘性をもたらす。なぜならば、ノートの（再）発見という出来事自体が必然的に多少なりとも意外性を帯びるうえに、このノートが忘れられていたのであれば、そこに記された作家の体験の現実性（リアリティ）はひとたび宙づりになるからである。このとき、忘れられたノートの存在が作り話であるなら、神秘性の演出は作品の外部を欺いて作品を孤立させ、書かれた体験は――たとえその体験が現実にあったことだとしても――書かれたものとしての現実性（リアリティ）を失うだろう。ところで、デュラスがノートから書き起こしたことがらが偽りであるか否かという文学から離れた問題について、デュラスは「苦悩に関してはごまかしなどしていない。いったい何が言いたいのか？」と息巻くが、関係者はこの点に留保をつけている。ミッテランはロール・アドレールに対し、「あれはまあ、われわれ〔デュラスとミッテラン〕の話ですが、わたしなら同様に語るとはいかないでしょう。『苦悩』は彼女の書物の中で、もっとも厳密だというわけでもありません」と答えている（*AMD*, pp.800-801）。デュラスとアンテルムの友人で、デュラスの連れ合いでもあり、アンテルムをダッハウ収容所に迎えに行ったディオニス・マスコロは、『苦悩』の内容の多くの部分について認めながらも、そこには一部、誇張があると言う。アドレール自身、「マルグリットは真実の名の下に書く――彼女の真実の名の下に」（*AMD*, p.799）として、『苦悩』を文学の領域で擁護しながらも、結局のところ「『苦悩』は戦争に関する歴史の本でも、客観的な証言でもない」と断じている（*AMD*, p.800）。

忘れられ、『苦悩』執筆時に見出されたとされるノートは、実際にはその時まで忘れられていたわけではなく、また、そこから書き起こされた『苦悩』の内容には誇張がある。とはいえ、この

ノートの発見とは、作家デュラスに特有の大袈裟な演出にすぎず、そこに書かれた出来事は現実から切り離されるべきなのだろうか。デュラスはそれを書いた記憶がないと言う。先の『緑の眼』のインタヴューや『アウトサイド』の小編の前文にあったように、デュラスによれば、ノートは実際には終戦時から終戦後に書かれたのではないかということである。プレイヤッド版の解説は、これを事実とみなしているようである（*ŒC III*, p.1773）。

確かに、ノートの存在を『苦悩』執筆時まで忘れていたというのは、言い過ぎではあるだろう。だが、ノートを書いた記憶がないとは、何を意味するのだろうか。一方、ミッテランとの対談でデュラスは、「わたしはデュパン街の郵便局の出来事（エピソード）を本当に何度も思い出すのです」（*BPD*, p.15, 一〇頁）と言う。デュパン街の出来事を「本当に何度も思い出す」という発言と、ロベールに関するノートを書いたことの忘却のあいだには、いかなる関係があるのか。そしてそれは、『苦悩』の中に描かれた出来事の現実性（リアリティ）にいかなる影響を及ぼすのだろうか。

2. 変わらず居座り続ける記憶

デュラスはミッテランに問いかける。「あなたはあの恐怖を覚えていますか」（*BPD*, p.28, 三四頁）。第１回目の対談で、デュラスは若きミッテランについて、「底知れぬ死の恐怖（crainte）の中にいながら、その恐怖につねに立ち向かう用意」があり、「恐怖（peur）」と闘うことが、彼の生に対する本当の情熱であったかのように、そこには驚異的な勇気があった（*BDP*, p.15, 一〇頁）と言いあらわしている。ミッテランは答える。「ここで恐怖（peur）について話しませんか」（*BDP*, p.15, 一〇頁）。彼は「ヴェルダンのあたりでのある瞬間を覚えています」（*BDP*, p.16, 一二頁）と語り始める。

> 少尉候補生がいましてね、起立しているんですよ、ビシッとね――全方位から弾やら爆発やらがやってくる中です――、わたしが彼のそばに行くと、彼は連絡係を呼ぶ。〔...〕われわれは、ちょうどいまのあなたやわたしみたいな位置にいて、少尉候補生はそこのミシェル・ビュテル のいるあたりにいた。で、彼ががっくりとくずおれ、死んでいる。もう二人とも、そんなことがわれわれに起こりうるなんてこれっぽっちも考えていなかった、さっきまでいた位置にそのままいるんですよ（*BDP*, pp.16-17, 一四頁）。

フランソワ・ミッテランは 1938 年の秋に兵役についた。パリに残ろうと考えた彼は予備役士官学校への入学を諦めて（*BDP*, p.16, 一三頁）、第二次世界大戦開戦後は歩兵隊配属となる。マジノ線付近で伍長として戦闘の準備をするが、「奇妙な戦争」のあと、1940 年 5 月にドイツ軍の攻撃が始まり、6 月 14 日、彼はヴェルダンの激しい戦闘で砲弾により負傷した。上記の引用はその頃のことであろう。ミッテランは病院に運ばれるもドイツの捕虜となり、ヘッセンにある捕虜収容所に送られる。レジスタンス運動のリーダーとしてゲシュタポに指名手配されるより先に、目の前で兵士が倒れ、自らも負傷して砲弾の中を運ばれるという恐怖を経験したミッテランは、デュラスとの対談でまずはこれを思い起こして語るのである。収容所で彼はジャン・ミュニエに出会い、ともにレジスタンス仲間として活動、生涯にわたりもっとも近しい友となった。ミッテランは二度の脱走失敗ののち、1941 年 12 月に三度目を試みて成功し、道中で周辺住民に助けられたり従姉妹や友人の家で休息を取りながら、フランス大西洋岸の近くに位置する実家を目指す。年が明けてようやく家にたどり着いた彼は、家族がフィリップ・ペタンを支持していたこともあって、その後ろ盾を得てヴィシーに移り、ペタンの活動を補佐する部局に職を得た。ユダヤ人や共産主義者、フリー・メーソンに対する嫌悪感を隠さなかったペタンであったが、にもかかわらず当時のミッテランがペタンを熱烈に支持していたことはいくつかの資料が明らかにしており、

これがもとで彼は後年、政敵から執拗な攻撃を受けることになる。在郷軍人奉公会から戦争捕虜復員局に移り、かなりの右派であるモーリス・ピノに出会って信頼を寄せたミッテランは、やがてピノが対独協力派の人物に取って代わられ左遷されると、彼とともに辞職して二人でレジスタンス運動に身を投じる。すなわち、ミッテランのレジスタンス運動は、右翼の人物と行動をともにしながらのスタートだった。それはペタン政権への強い不信によるものではなかった[5]。

ヴェルダンの砲弾のあとでこのようにして始まったレジスタンス運動の恐怖について、ミッテランは「恐怖以上の、耐えがたい苦痛」（*BDP*, p.28, 三四頁）と言いあらわしている。「ゲシュタポからぎりぎりのところで逃れたときには心臓がしばらくどきどきしたものです」（*BPD*, p.31, 三八-三九頁）。レジスタンス地下組織 MNPGD（戦争捕虜と強制収容所被収容者の全国救出運動）のリーダーであったミッテランは、ゲシュタポに指名手配されていた。「あのころはどこも混乱状態でした。レジスタンス運動の大部分において、すでにリーダーたちは逮捕されていた。組織のメンバーが大勢殺害された」（*BDP*, p.28, 三四頁）。1944 年 6 月 1 日の捜査は、MNPGD にとっては厳しいものだった（*BDP*, p.35, 四五頁）。「力の限界に達していた」（*BDP*, p.28, 三四頁）とミッテランは当時を振り返る。「なにしろあの男はわれわれのグループに大きな被害をもたらしましたから」（*BDP*, p.27, 三二頁）。「あの男」とは、6 月 1 日にジャン・ベルタンやロベール、マリー＝ルイーズらを逮捕し、ジャン・ミュニエが殴り倒して振り切ったゲシュタポの手先シャルル・デルヴァルである。『苦悩』では「ピエール・ラビエ」という名前で登場する彼が、デュラスに心を寄せていたようであることについては、対談と『苦悩』の双方に言及がある。

> 当時、あの手先、あのムッシュー（彼が本当のところは誰なのか、わかっていなかった）が、あなた〔デュラス〕に会いたいと執拗に言ってきた。この場合、会うべきか否か。わたしは何をしなければならないのか。あなたに「接触をつづけて。そのうちに何か得られるだろうし、彼が何を狙っているかわかるだろう」と言うことなのか。それは危険な賭けであり、今度はあなたが即刻逮捕されるということもありうる――あなたはあのような賭けには慣れていなかったし、あちらはそれが仕事だったから（*BDP*, p.23, 二六頁）。

連行された MNPGD の仲間の情報を得ることができるのは、デルヴァルからのみであった（*BDP*, p.34, 四三頁）[6]。ミッテランは「慎重にも慎重を重ねての熟議の結果」、デュラスにはデルヴァルと会い続けるという「任務を果たしてもらう」ことに決める（*BDP*, p.34, 四三頁）。6 月 1 日の検挙の際に現場にいながら連行を免れたジャン・ミュニエは書いている。「デルヴァルは彼女に惚れたようだ。この生まれたばかりの恋（passion naissante）を、彼女はわれわれのレジスタンス運動のために、もしも裏切り者がいるならその裏切ったメンバーの名前を聞き出すのに利用できればいいと考えている」（*BDP*, p.145, 一八五頁）。「撃ち殺される恐怖」（*BDP*, p.28, 三四頁）の中で、情熱（passion）が抵抗（レジスタンス）のための賭けに利用される[7]。「3 ヶ月間わたしが通いつめたゲシュタポの手先の記憶に関しては、恐怖が非常に激しく、思い出の中でも変化することがないほどです。度が過ぎていたのです、たぶんね。死にかかわる恐怖だったし、恐怖で死にそうになったし、恐怖で痩せ細った」（*BDP*, p.30, 三七頁）。

---

[5] 以上、Institut François Mitterrand, *Institut François Mitterrand* (https://www.mitterrand.org/)（アクセス日；2021 年 1 月 28 日）、また、ミシェル・ヴィノック（大嶋厚訳）『ミッテラン カトリック少年から社会主義者の大統領へ』（吉田書店、2016 年）（Michel Winock, *François Mitterrand*, Gallimard, 2015）を参考にした。

[6] 『苦悩』の「ムッシュウ X　仮称ピエール・ラビエ」にも以下のようなくだりがある。「わたしはラビエに会う。フランソワ・モルランの命令は絶対に守らなければならない。つまりわたしはラビエとのこの接触を続けるべきであり、これが連行された仲間たちとわれわれとの唯一のつながりなのだ」（*DL*, p.23, 一一四頁）。

[7] 『太平洋の防波堤』（1950 年）に描かれた、インドシナの植民地で家族によってその性を裕福な中国人青年との取引に利用される主人公の少女シュザンヌを思い起こさせる。

ラビエがわたしに「あなたの夫を逮捕して今日で二週間になりました」と言い、そしてまたドイツの脱走兵の逮捕についても、わたしの夫の逮捕と同様に「その脱走兵と知り合いになって２週間経ってみると、彼はわたしの友達になっていました」と言ったとき、凄まじい恐怖が思い出の中に入り込んでそこに居座り、わたしはこれほど死の近くにいたことはありませんでした（*BDP*, p.32, 三九頁）。[8]

上の話は、『苦悩』収録の「ムッシュウ X　仮称ピエール・ラビエ」にも見出される。ラビエは銃殺された脱走兵の運命を引きながら、ロベールらが逮捕されたデュパン街に顔を向け、左手を「わたし」の肩に置いて言う。「見てください。われわれが知りあいになって、今日でちょうど４週間になります」。そのとき、パリ解放の 1944 年夏は、「わたし」にとって「氷のように冷たくなった」（*DL*, pp.101-102, 一二四-一二五頁）。

恐怖の中で、頭から血が引いてゆき、視覚の機能が鈍る。セーヴルの交差点の大きな建物の上部が縦に揺れ、歩道がくぼんで黒くなっているのが見える。もう音もはっきりとは聞こえない。聞こえないというのは相対的なもので、通りの物音はぼんやりとして単調な海のざわめきに似ているのだが、ラビエの声はよく聞こえる。通りを見るのもこれが人生で最後なのだと考える余裕はある。だがその通りに見覚えがない（*DL*, p.102, 一二四頁）。

「その通りに見覚えがない」。視界が曇って通りの物音も薄れてくるほどの「凄まじい恐怖」、思い出の中で変化せずに居座るような堅固なそれ、「恐怖以上の耐えがたい苦痛」が、対談の中でたどられる。マザリーヌ・パンジョ言うところの「レジスタンスの時代とナチによるロベール・アンテルムの連行」というデュラスとミッテランの「共通の記憶」（*BDP*, p.9, 六頁）は、耐えがたい恐怖の記憶として語られるのである。

3. 錯綜する記憶

デュラスに心惹かれたデルヴァルは、彼女をカフェやレストランに繰り返し誘った（*AMD*, p.289）。ある日、デルヴァルはカフェ「フロール」で彼女に写真を見せて、この男を知っているかと尋ねる。これもまた「ムッシュウ X　仮称ピエール・ラビエ」に描写がある（*DL*, pp.105-108, 一二八-一三二頁）。彼女の前に出されたのはミッテランの写真であり、６月１日の検挙時にマリー＝ルイーズのアパルトマンから押収されたものと思われる[9]。デルヴァルがミッテランの顔を知ったのは、このときだったようだ（*BPD*, pp.23-24, 141-142, 二六頁, 一八二頁）。６月１日午前にデルヴァルが指名手配中のミッテランと顔を合わせていながら彼を逮捕しなかったのも、この写真を押収するまで、デルヴァルがミッテランの顔を同定していなかったからであろう。ミッテランは、デルヴァルの手に渡った写真について対談で以下のように語っている。

〔...〕あなた〔デュラス〕が教えてくれたところによれば、ときどき彼〔デルヴァル〕はわたしのことを話すという。モルランというわたしのレジスタンス名を知っているし、わたしがロンドンにいたことも知っている、と。だがそれまで彼はわたしの顔を見分けられなかったのです。マリー＝ルイーズを逮捕したとき、彼は箪笥の上のわたしの写真を見てとたんに

[8] これは『対談集』からの引用であるが、デュラスとミッテランは対談の中で、デルヴァルを『苦悩』の中で使われた仮名「ラビエ」で呼ぶことがある。
[9] ジャン・ミュニエは、検挙当日のマリー＝ルイーズのアパルトマンで、アルクール写真館撮影のミッテランらの写真がテーブルの上に乗っているのを見たと証言している（*BPD*, pp.141-142, 一八-一八二頁）。

> 「あいつだ！」と口走った。あの男がわたしを特定したのはそのときです。それまではわたしのことなんて知らない、名前は知っていても顔は知らなかった。彼は写真でわたしの顔を知ったのです。それで彼はいつもあなたに「モルランと知り合いですね？」と言って、あなたの話の辻褄が合わなくなるのを狙っていた…（*BPD*, pp.23-24，二六頁。）

ところが、「それで彼はいつもあなたに『モルランと知り合いですね？』と言って、あなたの話の辻褄が合わなくなるのを狙っていた…」〔傍点筆者〕と振り返るミッテランに対し、デュラスは異を唱える。「いいえ、いつもではなく一度だけ、フロールでね」〔傍点筆者〕（*BPD*, p.24，二六頁）。デルヴァルがデュラスに、モルランすなわちミッテランを知っているはずだと尋ねてきたのは、カフェ「フロール」での一度だけのことだとデュラスは主張するのである。ミッテランはこれに反論する。「いや、他にもありましたよ。ブルボン宮〔国民議会〕のそばでお会いしたのを覚えていますか。わたしのほうは自転車に乗っていた。あれはわたしがはっきり覚えていることのひとつですよ」（*BPD*, p.24，二六頁）。その日、ブルボン宮のわきでデュラスがある男と立ち話をしているところに、ミッテランが自転車で通りかかった。彼は自転車から飛び降りて、「こんにちは、マルグリット、元気かい？」と挨拶をした（*BPD*, p.24，二六頁）。

> わたし〔ミッテラン〕はあなた〔デュラス〕の様子が少し…なにか困っているようなのを見て取る。そこにいたのはラビエだったんですよ。つまり、わたしを探していて、あなたに何度か「モルランを知っていますか」と質問した彼。それなのにあそこであなたがわたしを知っていることが明らかになってしまった。わたしがあなたに、こんにちは、なんて言ったものだから！！あなたがどんな態度をとったかは忘れましたが、しくじったことは自分でもわかりました。それで「さようなら！さようなら！」と言いながら急いで立ち去りました。〔…〕のちにお会いしたとき、翌日かその次の日でしたが、あなたはわたしに、彼がこう言ったと教えてくれました〔…〕。「ああ、今回、彼はすんでのところでわたしから逃れましたよ！」でもあなたは疑われることになった、あれ以来、あなたのほうがです（*BPD*, p.24，二六頁）。

これに対しデュラスは、「いま、気がついたわ、そのことは忘れていました」（*BPD*, p.25，二七頁）と答える。ミッテランの記憶によれば、彼が国民議会のそばでデルヴァルと立ち話をするデュラスにうっかりあいさつをしてしまうという失態を演じた前にもあとにも、デュラスはデルヴァルからモルランと知り合いか否かを執拗に問われており、それは「フロール」での一度かぎりのことではないはずだという。だが、デュラスの記憶はミッテランが示すこれらの事実関係とは異なる。「だけどそれならフロールの話はいつのことだったのでしょう？彼があなたの写真を見せてくれたとき…」（*BPD*, p.25，二七-二八頁）。国民議会のそばを自転車で通りかかったミッテランと鉢合わせて、ゲシュタポの手先の目の前で互いにあいさつを交わしてしまったのちに、カフェ「フロール」でデルヴァルからレジスタンス運動のリーダーであるミッテランの等身大の写真を見せられたなら、ミッテランの顔も夫アンテルムのレジスタンス運動も知らない風を装うのは、逆に運動の関係者であることを告白しているようなものであろう。それはデュラスにとって、終わりを意味するのではないだろうか。ところが、デルヴァルはこのあとも彼女を食事に誘い続けるのである。

こうして、デュラスとミッテランの記憶のパズルは錯綜し、噛み合わなくなってゆく。国民議会のそばで起きた出来事について、デュラスは言う。「『苦悩』の中でわたしはあなた〔ミッテラン〕のことは語っていないけれど、わたしが取り次ぐことになっていた二人の男のことは話題にしました」（*BPD*, p.25，二七頁）。『苦悩』の中でデュラスが話題にした二人の男とは、「ムッシュウX　仮称ピエール・ラビエ」に登場するデュポンソーとゴダールのことである（*DL*, pp.91-93，一一〇-一一三頁）。彼らはMNPGD関係のレジスタンス仲間だったが、互いに顔を知らなかった。

ある日、「ロベール・L」の妻である「わたし」は、二人を引き合わせることになる。その顔合わせの場所とは、国民議会のわきである。「わたし」がデュポンソーと話していると、5分もたたないうちにラビエが数メートル先にやって来て、「わたし」を呼ぶ。「わたし」がラビエのところに行って話していると、ゴダールがやって来る。ゴダールがラビエをデュポンソーだと勘違いして、「わたし」に近寄り、運動のことを話し始めるのではないだろうかと考えた「わたし」は、「もうだめだ」と思う。「わたしの顔は青ざめているはずだ。歯が鳴らないように顎をぐっと締める。ラビエはそれに気づいていないようである。10分のあいだ、彼はしゃべっている。わたしは何も聞いていない」（*DL*, p.92, 一一二頁）。実際には、ゴダールはなぜか「わたし」に近づかず、離れたところでじっとしていた。彼らはこのあと逮捕もされず、難を逃れたのだった。

「あれはわたしがはっきり覚えていることのひとつですよ」と言うミッテランではあるが、国民議会のそばでレジスタンス仲間とゲシュタポの手先が偶然居合わせるというこのエピソードについて、ミッテランが混同しているかもしれないということに、デュラスは気づき始めたのだろう。「だけどそれならフロールの話はいつのことだったのでしょう？彼があなたの写真を見せてくれたとき…」。ミッテランは「みんなの記憶はぴったり一致するものではなく、脆い記憶のフィルムのうえに焼き付けられたものですから変化していきます。しかし結局、横糸は厳密に同じですがね」（*BPD*, p.27, 三二頁）と返すが、デュラスはなおも食い下がる。

> ええ、だけどフロールでのことが国民議会わきの出来事の前だったかあとだったかはもう知りようがないということについては、ちょっと別。わたしにとってフロールはまさに取引の場所だった。どうやって切り抜けようか、なんてあそこでは思わなかった（*BPD*, p.27, 三二-三三頁）。

つまりデュラスは、「歯が鳴らないように顎をぐっと締め」なければならないような恐怖を抱きながら国民議会わきでミッテランとデルヴァルの居合わせに立ち会ったとして、そのあと「フロール」でデルヴァルに会い、彼が取り出す実物大のミッテランの写真に知らぬふりをしながら「どうやって切り抜けようか」と内心震えた記憶がないのはおかしいというわけである。ここで錯綜する記憶をときほどくのは、恐怖である。「思い出の中でも変化することがな」くそこに居座り続ける激しい恐怖を手がかりにして、デュラスは記憶をたどりなおそうとする。それは「変化することがな」い、ミッテランと共有されうる「厳密に同じ」「横糸」であるのだ。

ロール・アドレールは国民議会わきの出来事について、デュラスとの対談の直前に『苦悩』を読んだミッテランが思い違いをしたのだろう、なぜならば戦争中のその頃のミッテランは国民議会のわきを通ることがなかったからである、としている（*AMD*, p.286）。この理由が説明になっているかどうかはともかく、アドレールが掲げるデルヴァルの裁判記録には、ゴダールとデュポンソーの連絡係を務めたデュラスの証言が記載されていることから（*AMD*, pp.313-314）、ゴダールとデュポンソーのエピソードが事実であるのはほぼ確かであると考えられる。一方で、ミッテランがはっきり記憶していると断言する国民議会わきでの出来事は、思い違いであった可能性が高い。しかしながらそうであれば、デュラスが主張するように「フロール」で彼女がミッテランの写真を見て知らぬふりをしたのちに、写真に写っている本人が国民議会付近で向こうからやってきて彼女にあいさつした際に、なぜデルヴァルはミッテランを追わなかったのか。あるいは、この出来事があってもデルヴァルがデュラスを逮捕しなかったのはなぜなのだろうか。

4. 忘却と沈黙あるいは『対談集』の現実性（リアリティ）

実は、第 1 回目の対談中、デュラスとミッテランの記憶が互いに食い違ったのは、国民議会そばの出来事についてのみではない。「わたしにもわかりませんが」（*BPD*, p.25, 二八頁）とミッテランは続ける。「その後のことですが…あなたが〔ラビエの裁判で〕証言したとき…」（*BPD*, p.25, 二八頁）。デルヴァルは 1944 年のパリ解放後の秋に、隣人の通報で対独協力者として逮捕された。MNPGD はこれを把握しておらず、解放直後の混乱の中で釈放されたデルヴァルであったが、すぐに MNPGD の手に渡り、裁判にかけられる。1944 年 12 月 10 日、いまだ行方のわからない夫アンテルムを待ち続けるデュラスは、当然のことながらまずデルヴァルを告訴する側の証人となる（*AMD*, p.319）。ところがその数日後、彼女は 2 回目の証言で今度はデルヴァルの行為を擁護する。デルヴァルは、デュラスがロベールを救おうとしてデルヴァルに渡した金銭を受け取らなかった。また、彼がユダヤ人の家に押し入ったとき、すでに住人一家が逃げたあとのもぬけの殻となった家のテーブルの上に子供の絵が残されており、そこに「愛するパパへ」と書いてあったことに感動したデルヴァルは、そのユダヤ人の逮捕を取りやめた（*AMD*, pp.319–320）。非道な振る舞いを続けたゲシュタポの手先について告訴側で証言した直後に、態度を翻すかのようにして弁護側に有利なこれらのデルヴァルの行為を証言したデュラスに、法廷は騒然となった。

ミッテランはデュラスに尋ねる。「あれは彼〔ラビエ〕の側でしたか？それとも反対側でしたっけ？」デュラスは答える。「両方です」（*BPD*, p.25, 二八頁）。ミッテランは思い出そうとする。「あなたは『苦悩』の中でそのことをはっきりとは書いていませんね…それでわたしの記憶ともきちんと合わなくて」（*BPD*, p.25, 二八頁）。ミッテランは、デュラスが最初にデルヴァル側の証人として、次に告訴側の証人として証言したと思い込んでいる。これに対し、「順序が逆です」（*BPD*, p.25, 二八頁）としてデュラスはミッテランの記憶違いを正すべく手を貸す。だが、ここでミッテランの記憶が錯綜して「きちんと合わなく」なっているのは、夫を強制収容所送りにして自分とレジスタンス仲間に激しい恐怖をもたらしたゲシュタポの手先を、告訴側から証言した直後に今度は弁護するというデュラスの態度ゆえのことである。そして、デュラスの証言が激しい両義性を見せているのは、デルヴァルの冷酷な捜査が一貫性を欠いているためである。さらに、国民議会わきと「フロール」での出来事の時間的な関係について、デュラスとミッテランの話の辻褄が合わず、対話が混沌としてくるのは、デルヴァルの残忍さをいっそう極まるものにするところの曖昧さ、つまり、あるときにはユダヤ人の子供の絵やメッセージに心動かされて逮捕を取りやめ、また別のあるときにはドイツ人脱走兵を「すばらしい男」「友達」と呼びながらも銃殺させる（*DL*, p.102, 一二四-一二五頁）彼の感覚、あるいは連行したロベールの妻デュラスへの恋心と、無関係であるはずはない。すなわち、デュラスとミッテランの記憶の錯綜と忘却はそれ自体が、対独協力者の震える感情と悪辣さのせいで一貫性の失われた行為を伝えているのである。彼らの対談の現実性（リアリティ）はここにある。

デュラスのほうもまた、忘却の淵に沈もうとする記憶を、ミッテランの手を借りて拾い上げようとする。デルヴァルの銃殺計画に触れるミッテランに、デュラスは言う。「レ・ドゥ・マゴの前ね」（*BPD*, p.35, 四四頁）。だが、ミッテランはそれに同意しない。「わたしはレ・ドゥ・マゴのことは覚えていないですね」（*BPD*, p.35, 四四頁）。二人の記憶はまたしても噛み合わない。デュラスは、銃殺計画を知らなかった、誰からも知らされていなかったと言うのだが、街中でデルヴァルを始末しそこねて帰ってきたコマンドのリーダーの剣呑な言葉をミッテランが語って聞かせると、彼女は思い出すのだ。「なんて恐ろしい。でもそれなら知ってたわ。…で、忘れていた…信じられない、忘れていたわ」（*BPD*, p.36, 四五頁）。危うくデルヴァルとともに「処刑」されていたにちがいないという恐怖が、薄れる記憶の「厳密」な横糸として、デュラスとミッテランの記憶の復元の試みを助けるのである。

デュラスは対談の中で、全部忘れていたと打ち明ける。ディオニス・マスコロとジョルジュ・ボーシャン[10]に抱えられて帰ってきたロベールの姿を見て衝撃を受け、すぐに部屋に戻って箪笥の中に身を隠したことも。ダッハウでロベールを見つけたミッテランが、彼を連れ帰るための車と通行許可証を手配するためにパリへ戻って来たことも。そのミッテランがデュラスと一緒にアパルトマンの階段に腰を下ろして、ロベールの帰りを待っていたことも。「記憶が完全に支離滅裂になっている」。「あの帰宅についてはほとんどすべて忘れてしまった。彼、ロベールのこと以外は」（*BPD*, p.21, 二一-二二頁）。デュラスだけではなく、ロベールの妹のアリスも――ロベールのもうひとりの妹マリー＝ルイーズは収容所から帰ってこなかった――ロベールのこと以外は「全部忘れてしまった」（*BPD*, p.21, 二二頁）と言う。そして驚くべきことに、デュラスはミッテランに向かってこうも尋ねる。「ところで、ロベールはどこで逮捕されたのでしたっけ？わたしは彼とヴィユ＝コロンビエ座で合う約束をしていたような気がするけれど、もう忘れたわ」（*BPD*, p.36, 四六頁）。

ロベールの逮捕時にゲシュタポに踏み込まれたマリー＝ルイーズがミッテランからの電話に対し機転を利かせたという出来事を、ミッテランと語り合っていたにもかかわらず、デュラスはロベールの逮捕に関してこのように忘れてしまう。そのただならぬ記憶の喪失に直面したミッテランはしかしながら、デュラスに向かって何事もなかったかのように平然してと答える。「彼はデュパン街５番地で、他の三、四人といっしょに逮捕されました」（*BPD*, p.36, 四六頁）。

> ジャン・ミュニエに尋ねてみるといいかもしれない。逃げおおせた唯一の人物で、いまも健在だから。ジャン・ミュニエは彼らといっしょにアパルトマンにいて、ゲシュタポが入ってきたとき、とっさに――彼は運動神経が抜群で勇敢でもあった――人がいるところをかきわけ、見張りの奴らを突破して階段を駆け下り、デュパン街に出て助かった（*BPD*, pp.36-37, 四六頁）。

ミッテランはその夜遅くにミュニエと会って、捜査の様子を彼から聞いたと言う。だが、ここでミッテランが語るその様子の一端は、これもまた『対談集』の補遺にあるミュニエの証言とは異なっている。ミュニエによれば、この日はミッテランが姿をあらわさないので、通りに出て彼を待つことにした。そこに金縁の眼鏡をかけた背の高い男すなわちデルヴァルが車でやってきて身分証提示を求めたので、ミュニエはデルヴァルを殴り倒し、走って逃げたということである[11]。

以上のような記憶の錯綜と忘却は、この対談が 1985 年のものであって戦後 40 年を経ていれば、自然なことであるとも言える。しかしながらそればかりではなく、これまで見てきたような二人の対談における記憶の錯綜と忘却は、ノーフル＝ル＝シャトーの青い箪笥の中にしまわれたまま忘れられ発見されたノートの、そしてまたそこから書き起こされた作品と書かれた出来事の現実性（リアリティ）を――たとえロール・アドレールが「『苦悩』は戦争に関する歴史の本でも、客観的な証言でもない」と断じたとしても――保証するのでもある。『苦悩』のエクリチュールは、忘れられたノートから書き起こされたという演出で故意に付与される神秘性によって、外部から切り離され孤立に追い込まれるのではない。それはデュパン街の郵便局の出来事（エピソード）を「本当に何度も思い出す」とともにあのノートを「書いた記憶はない」とする危機的な忘却の現実性（リアリティ）によって解放され、作品の外へ、「文学の沖」へと漕ぎ出るのである。作家デュラスと政治家ミッテランのあいだ、すなわち文学と政治の境界であればこそ解放される言葉の自由によって、この対談であらわにな

---

[10] ジョルジュ・ボーシャン（Georges Beauchamp ; 1917-2004）は、ロベール・アンテルムの同級生で、MNPGD のメンバー、政治家。

[11] ロール・アドレールによれば、ジャン・ミュニエはマリー＝ルイーズの部屋から、通りで要人が平服のまま二人の警官に付き添われているのを発見し、危険を感じて階段を駆け下りたところ、警官らから身分証提示を求められたということである。アドレールは 1996 年にミュニエにインタヴューしているが、これはそのときに聞き出したのかもしれない（*AMD*, pp.275-276）。一方、『対談集』の巻末のミュニエの証言には、2005 年 11 月の署名がある。

る二人の記憶の錯綜と忘却は、剥き出しで単調であるがゆえに文学が恥じ入るほどに真に迫る「苦悩」のエクリチュールや、「文学の沖」にいまだ漕ぎ出るか不明のラビエに関するテクストをひき上げて、これらを現実につなぐ。と同時に二人の記憶の錯綜と忘却はそれ自体もまた、対談の現実性（リアリティ）として歴史的事実に織り込まれる。それはどのようにしてだろうか。

それはたとえば、ドイツに惹かれたフランス人であり、ナチスに加担しデュラスに恋をして自らの役割を少し大きく見せすぎ、罪状もさして明らかにならないまま 1945 年初頭に銃殺された（*AMD*, pp.288, 317, 321）デルヴァルの悪辣さと欺瞞と感情の襞を、対談における記憶の錯綜と忘却がおもむろに映し出すようにしてである。それからまた以下に示すとおり、デュラスとミッテランが忘却のみならず沈黙をも共有しながら、ロベール・アンテルムの言葉の解放を生きるようにしてである。ミッテランは、ロベールの逮捕と帰還について公の場で語ったのがこの 40 年間で一度しかないということに、対談の中で二度触れている（*BPD*, pp.32-33, 三九頁, 四一頁）。と同時に彼は、デュラスが同じく 40 年のあいだ、ロベールの逮捕に関し沈黙していたことにも言い及んでいる。「あのときについての書物を公にするまで 40 年のあいだ、あなたは待ちました」（*BPD*, p.33, 四一頁）。 実際には、終戦後 40 年を経てこの対談の直前に『苦悩』を世に問うまで、デュラスは戦争のモチーフを作品にまったく取り入れなかったわけではない。が、それらのモチーフ、あるいはモチーフにいまだなりえない描写を含む作品は、「文学が恥ずかしくなる」ような、または「文学の沖」に出るものではないエクリチュールとしての 1985 年の『苦悩』とは異なる、いわば逮捕され瀕死の状態で帰ってきたロベールのことについては語りえないという沈黙を提示したテクストであると言える[12]。この沈黙と、恐怖と、そして忘却を、デュラスとミッテランはわかちあったのだった。

> われわれはこの 40 年間、わりあいよくお会いしましたが、あのことについてじっさいにはまったく話しませんでした。われわれのものであるあの歴史＝物語について互いに語り合うことはなかったですね。――イエールでの対話を除いてですが。あのときはいい天気でした…（*BPD*, p.33, 四一頁）

ミッテランが 40 年間で一度だけ公的な場でダッハウ収容所について語ったというイエールでの対話とは、フランス社会党がヨーロッパ映画の保護を目的として 1980 年に南仏イエールで開催した映画映像ヨーロッパ会議での発言を指す。当時まだ大統領の職に就いていなかったミッテランは、社会党第一書記として会議に参加し、ダッハウ収容所に足を踏み入れた経験を語ったのだった。「あのときはいい天気でした…」。会議が開催されたのは 6 月であったから、南仏の晴天日は印象的であっただろう。だが、フランスの田舎の風景を好むミッテランの、地方都市の晴れた日の光景を懐かしむ一言が意味するのは、それだけではあるまい。まさにミッテランは、FR3 がこの対談について報道した際にデュラスが言及したところの、彼が「あえて口にはせずしかし言いたかったことをこれらの対談で語りえたというその『幸福』」[13]を照らす光、すなわち、ロベールの逮捕とそのあとの恐怖を経て、収容所で瀕死の友を見出し、その救出を成し遂げた喜びを語る言葉が、40 年の沈黙ののちに自由になったという幸福を照らすイエールの光の記憶を、口にしたにちがいないのだ。それはまたロベール・アンテルムが、収容所からパリに戻ったあと、重篤状態から脱した 1945 年 6 月に、彼をダッハウに迎えに行ったディオニス・マスコロに宛てた手紙の中で語っている「幸福」なのでもある。パリへの帰り道、衰弱しながらも車中でマスコロらに語り続け、パリの自宅の病床ではデュラスとマスコロに向けて飽かず語ったことについて、

---

[12] これについて筆者は「マルグリット・デュラスは書かなかった――忘却された戦争のテマティーク――」『相模女子大学紀要』VOL.69A（2005）で論じた。

[13] L'Institut national de l'audiovisuel, *Entretien Mitterrand Duras*（https://www.ina.fr/video/CAC86010078）（アクセス日；2021 年 1 月 28 日）。

ロベールは手紙に書いている。地獄では、つまり収容所では「人はどんなことでも言う」、だが世間では「人は選ぶという習慣をもっている」、そしてロベールは「もう選ぶことができないと思う」（*EM*, p.14）。すなわち、

> かろうじて形をなしたかのような、ともあれ使い古されておらず、年月を経てもいないが、しかしただひたすら僕の呼吸に合わせたような数々の語を自由にしてあげられたこと。これだ、この幸福こそが決定的に僕を傷つけ、そしてその瞬間に僕は、病気――チフス、高熱など――による死からこんなにも遠いと感じた僕は、自分が死ぬのはこの幸福によってでしかありえないと思った。そして今、僕は物に再び形を与え始めた。少なくとも僕の精神と僕の身体はそれを試みた。しかし君に繰り返し言うようだが、僕にはもう選ぶということができない（*EM*, p.14）。〔傍点筆者〕

「これだ、この幸福こそが決定的に僕を傷つけ、そしてその瞬間に僕は、病気――チフス、高熱など――による死からこんなにも遠いと感じた僕は、自分が死ぬのはこの幸福によってでしかありえないと思った」。収容所の悲惨からこれほどにも遠いところで、収容所の流儀で、まだ形を与えられているかいないかの境界上のものを、混沌としたまま言葉に乗せ、呼吸に合わせて解放し自由にしてやることの「幸福」を、瀕死の状態を脱したロベールはマスコロに書き送ったのだった。だが、マスコロは告白する。「当時読まなかったということはまったくもってありえないのに、わたしはこの手紙についてのいかなる思い出も本当にないのだ」（*EM*, p.12）。親友からの手紙を、彼もまた忘れていたのである。

デュラスは対談の中で、当時のロベールの状態に触れている。「あなた〔ミッテラン〕と共通の友人の、ロベール・A を思い出します。彼は生き残った。聡明な人だけど、いまは記憶が一部消去されてしまって。短期記憶が失われるのです」（*BPD*, p.18, 一六-一七頁）。ロベール・アンテルムは 1983 年夏、脳血管障害によって不随になり、記憶に障害をもつこととなった。

> F・M――彼〔ロベール〕に会いに行ったとき、わたしを見てはじめてにっこりしてくれました。わたしが会ったときは、まだ話せなかった時期で…ほんの二言三言でね…それでわたしが一方的に彼に話したのです、とりとめのない話をね――そんなとき人がひたすらに没頭する、演技とでも言うべきものをご存じでしょう、あたかも何事もないかのように話すという…彼はわたしの話を聞いてくれたし、口元には楽しんでいる様子さえ見えたけれども。しかし彼はあのとき、話を理解していたのだろうか？わたしが話して聞かせた昔の出来事を、彼はしかるべき時間と場所に位置づけられたのだろうか？そうではなかったような気がしますね。
> M・D――彼は奥さんのモニックに行ったそうよ、あなたが会いに来たって。
> F・M――それじゃ、覚えていたんですね。少なくともその直後は。
> （*BPD*, p.18, 一八頁。）

ミッテランはデュラスとともに、ロベールが横たわっていたダッハウ収容所について「あたかも何事もないかのように」長いあいだ沈黙した。そして次に、ロベールがとらわれた「もう選ぶことができない」という地獄の流儀にしたがって、錯綜する記憶を「とりとめのない話」でたどりながら、ロベールの道程と彼の記憶の喪失を生きる。デュラスはこれに加え、デルヴァルの告訴側と弁護側を選ばずに証言し、ロベールのやり方を残酷な仕方でなぞった。デュラスだけではなくミッテランもまた、デルヴァルとの最後の面会で「われわれは心の底から語り合いました。かなり自由な精神でもってね」（*BPD*, p.27, 三〇頁）と回想している。デルヴァルはデュラスを逮捕せず、ミッテランを見逃した。それがゲシュタポの手先としての企みだったのか、不注意のせいだったのか、あるいはまた別の理由があったのかはわからない。デルヴァルは、彼とは比べ

ものにならないほど暴虐のかぎりを尽くしたローリストンのゲシュタポことボニー＝ラフォンの犯罪集団とともに有罪とされ、処刑された（*AMD*, p. 321）。恐怖の記憶と表裏一体のこの謎こそは、地獄の流儀をロベールとともに生きるデュラスとミッテランの対談のとりとめのなさが伝えるところのものである。

第二次世界大戦直後のフランスにおけるドイツ人や対独協力者に対し、デュラスは彼女自身も当事者として憎悪の念を抱きながら、制裁には懐疑的であった。『愛人』が刊行された 1980 年代でさえも、対独協力者の擁護とも読める彼女の作品中の表現に対し、世間からの厳しい反応があったことについては、『緑の眼』（*YV*, p.237, 二五二頁）に言及がある。憎悪から夫と仲間を、あるいは他の誰かを取り戻そうとする抵抗（レジスタンス）は、戦後 40 年を経てもなお続けられる理由があったのだ。デュラスとミッテランの『対談集』は、文学と政治のあいだに茫洋と広がる言葉の連なりによってロベールの言葉の解放を生き、沈黙を通過した彼らの「歴史＝物語」を公にしながら、対独協力者の悪辣で残忍な行為と欺瞞、そして依然として残る謎を映して文学を越え、終わらない抵抗（レジスタンス）を現実世界につなぐ。この意味において『対談集』の第 1 回目対談は、そのうちにリアリズムを湛えていると言える。

結びにかえて

本稿では、『デュラス×ミッテラン対談集　パリ 6 区デュパン街の郵便局』について、第 1 回目対談に焦点を絞り、作家デュラスと政治家ミッテランの対話の特徴を分析した。第 1 回目対談は、主としてデュラスの夫ロベール・アンテルムの連行と強制収容所からの生還、そして第二次世界大戦中のデュラスとミッテランのレジスタンス運動についての回想が中心となっている。直前に出版されたデュラスの作品『苦悩』がこれらを主題としており、また、ミッテランが『苦悩』を読んで対談に臨んでいることから、ここではデュラスの文学作品のうち、とくに『苦悩』を参照しながら、二人のあいだでかわされる茫漠とした対話について解明することを試みた。

まず、『苦悩』の成立に関わるエピソードとこれに対する世間の反応から出発した。青い箪笥にしまわれたまま忘れられていたノートの発見が『苦悩』執筆の発端になったというエピソードの荒唐無稽さと、二人の対談のとりとめのなさには、内的関係がある。対談中にたどられる彼らの記憶は、第二次世界大戦から 40 年という長い年月によって摩耗し、ときに変形している。それらを対談で照らし合わせながら、二人は記憶を忘却から引き上げようとするのだが、ここでひとつの問いが浮上する。なぜ 40 年もの長い年月を経ての回想なのか。これについては、ミッテランが対談の中で答えを出している。強制収容所へと送られたロベールを取り戻すための抵抗（レジスタンス）を書物にするまで、40 年のあいだ、デュラスは待ったのだ、と彼は言う。デュラスは 1985 年の『苦悩』の出版まで、戦争を作品の中心的なテーマに据えたことはわずかながらあるものの、主として愛の物語のわきの小さなモチーフとして扱うことが多かった。耐えがたい苦痛となるような恐怖と隣り合わせの日々をもたらしたロベール・アンテルムの逮捕について、彼女は 1985 年まで（正確には 1976 年の『ソルシエール』への寄稿まで）、その体験を痕跡として作品中に残しながらも、あえて沈黙していたのだと言える。そしてまたミッテランも、ロベールを見出したダッハウ収容所について、1980 年に初めて公の場で語るまで、その出来事に言い及ぶことはなかったのである。

沈黙を通過して変形し薄れていく記憶を、対談の中で忘却から引き上げる手がかりとなるのは、年月を経てもなお形を変えずに残る強烈な記憶としての恐怖である。二人の対談はこの恐怖の記憶をたどりながら、文学と政治のあいだで自由になった言葉に、噛み合わないエピソードを乗せて、とりとめなく繰り広げられることになる。そこで語られる噛み合わない話とは、ロベールと仲間たちの逮捕によってミッテランらのレジスタンス運動に打撃を与えた、ゲシュタポの手先に

まつわるエピソードに関するものである。この対独協力者は、残忍、卑劣でありながら独特の弱さや愚かさを隠しきれず、そしてデュラスに恋心を抱いてもいる。彼はデュラスやミッテランをなぜか取り逃がしたままにして、パリ解放を迎える。デュラスはこのゲシュタポの手先が自分に対して抱き始めた情熱を利用しようと謀りながら、憎悪をあらわにし、恐怖に怯えつつも、彼を冷めた眼でとらえて弁護側の証人として法廷に立ちもする。40 年の沈黙のあとの回想を交換するデュラスとミッテランの対談のとりとめのなさは、このデルヴァルの、そしてデュラスの、さらにはデルヴァルと「自由な精神で」語り合うミッテランの両義性を映しているのであり、そこに彼らの対談の現実性（リアリティ）がある。青い箪笥の中に眠っていたノートについての荒唐無稽さは、この現実性（リアリティ）の直接的な発現である。

デルヴァルは銃殺された。一方、連行された夫を取り戻すための厳しい駆け引きによるのであるにせよ、『苦悩』全体を読み通せば推し量ることのできるような感情の揺れがデュラスにもあったことは、いくつかの証言によって示唆されている。記憶の錯綜と忘却に支配されたかのような対談がもう一歩進んであらわにするのはこの謎であり、すなわち憎悪を前にしたレジスタンス運動の奥底にある、今となっては解明しきれない悲劇と苦悩である。そして、デュラスの「良心」にしたがったデルヴァルの弁護や、『ヒロシマ・モナムール』のドイツ兵を惜しみ、『愛人』の対独協力派の文人を懐かしむ表現こそは、たとえそれらに対して世間が眉をひそめようとも、デュラスが第二次世界大戦後 40 年ものあいだ取りおいたあとで『苦悩』に書きあらわした、解明されえない悲劇に対する抵抗（レジスタンス）なのである。この終わらない抵抗（レジスタンス）が、作家と政治家の解放されて自由に紡がれる言葉によって、文学を離れ、混沌とした対話から浮かび上がるかぎりにおいて、デュラスとミッテランの対談には、確かなリアリズムが認められると言える。

参考資料

（本文および注に示した引用のうち、インターネット上の資料以外からの出典については、タイトルを以下の括弧内に太字で記した略号で表し、ページ数は原書のそれを算用数字で、邦訳書のそれを漢数字で表記した。フランス語資料からの引用はすべて筆者が訳出したが、邦訳文献を参考にさせていただいたものもある。邦訳者各位に御礼申し上げます。）

- Marguerite Duras, *Hiroshima mon amour*, Gallimard, 1960. マルグリット・デュラス（清岡卓行訳）『ヒロシマ私の恋人』筑摩書房、1990 年 ;（工藤庸子訳）『ヒロシマ・モナムール』河出書房新社、2014 年。
- Marguerite Duras, *Les yeux verts*, Cahiers du cinéma, 1980 ; 1987. マルグリット・デュラス（小林康夫訳）『緑の眼』河出書房新社、1998 年。（***YV***）
- Marguerite Duras, *L'Amant*, Minuit, 1984. マルグリット・デュラス（清水徹訳）『愛人』河出書房新社、1985 年。
- Marguerite Duras, *La douleur*, P.O.L., 1985. マルグリット・デュラス（田中倫郎訳）『苦悩』河出書房新社、1985 年。（***DL***）
- Marguerite Duras, François Mitterrand, *Le bureau de poste de la rue Dupin et autres entretiens*, Gallimard, 2005. マルグリット・デュラス、フランソワ・ミッテラン（坂本佳子訳）『デュラス×ミッテラン対談集　パリ 6 区デュパン街の郵便局』未来社、2020 年。（***BPD***）
- Marguerite Duras, *Cahiers de la guerre et autres textes*, P.O.L./IMEC, 2006; Gallimard, 2008 ; 2009（本稿における原書の出典は Gallimard 版による）. マルグリット・デュラス（田中倫郎訳）『戦争ノート』、2008 年。（***CG***）

- Marguerite Duras, *Œuvres complètes*, Tome I, II, III, IV, Gallimard, 2011~2014.（***ŒC***）

- Dionys Mascolo, *Autour d'un effort de mémoire*, Maurice Nadeau, 1987.（***EM***）
- Laure Adler, *Marguerite Duras*, Gallimard, 2000; 2002.（***AMD***）
- Michel Winock, François Mitterrand, Gallimard, 2015. ミシェル・ヴィノック（大嶋厚訳）『ミッテラン カトリック少年から社会主義者の大統領へ』吉田書店、2016 年。

- Institut François Mitterrand, *Institut François Mitterrand* (https://www.mitterrand.org/)
- （アクセス日；2021 年 1 月 28 日）。
- L'Institut national de l'audiovisuel, *Entretien Mitterrand Duras*（https://www.ina.fr/
- video/ CAC86010078）（アクセス日；2021 年 1 月 28 日）。